

出羽国北部の様相

秋田市観光文化スポーツ部文化振興課 佐藤桃子

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 小山美紀

はじめに

秋田城跡と払田柵跡で出土した施釉陶磁器は、各報告書にて詳細が報告され考察が重ねられてきた。秋田県全体の様相については村田淳の論考がある。村田は秋田城跡と払田柵跡では施釉陶磁器は鍛冶・漆関連工房から出土しており、意図的な埋納ではなく生産開始または終了時の儀礼に用いられたと推測し、城柵以外の遺跡については県北部と県央・県南部では様相が違うことを指摘している(村田 2012・2013・2016・2017)。

1. 秋田城跡

史跡秋田城跡は、秋田市西部、寺内地区を中心とする標高40~50mの通称高清水丘陵上に位置した古代城柵である。古代出羽国北部の行政・軍事・文化の中心地としての性格を持ち、津軽(青森)や渡島(北海道)などの北方の蝦夷との交易と交流の拠点として、さらには大陸の渤海国との外交拠点としても重要な役割を果たしたと考えられる。外郭と政庁からなる二重の基本構造と城内外施設が把握されており、城内には中心施設の政庁のほか、実務官衙建物群や居住域、鍛冶等の生産施設、倉庫群などが確認されている。

秋田城全体での施釉陶磁器出土状況は灰釉陶器が61点、緑釉陶器が29点、輸入陶磁器4点(白磁2点、青磁2点)となっている(第1表)。

出土地点には偏りがあり、主に外郭東門から政庁に居たる間の地区である大畠地区、外郭南東外の秋田城内より一段低い場所にある鶴ノ木地区、外郭南辺付近から場外南側の一帯である大小路地区となっており、その他少数点他の地区で確認されている(第1図)。

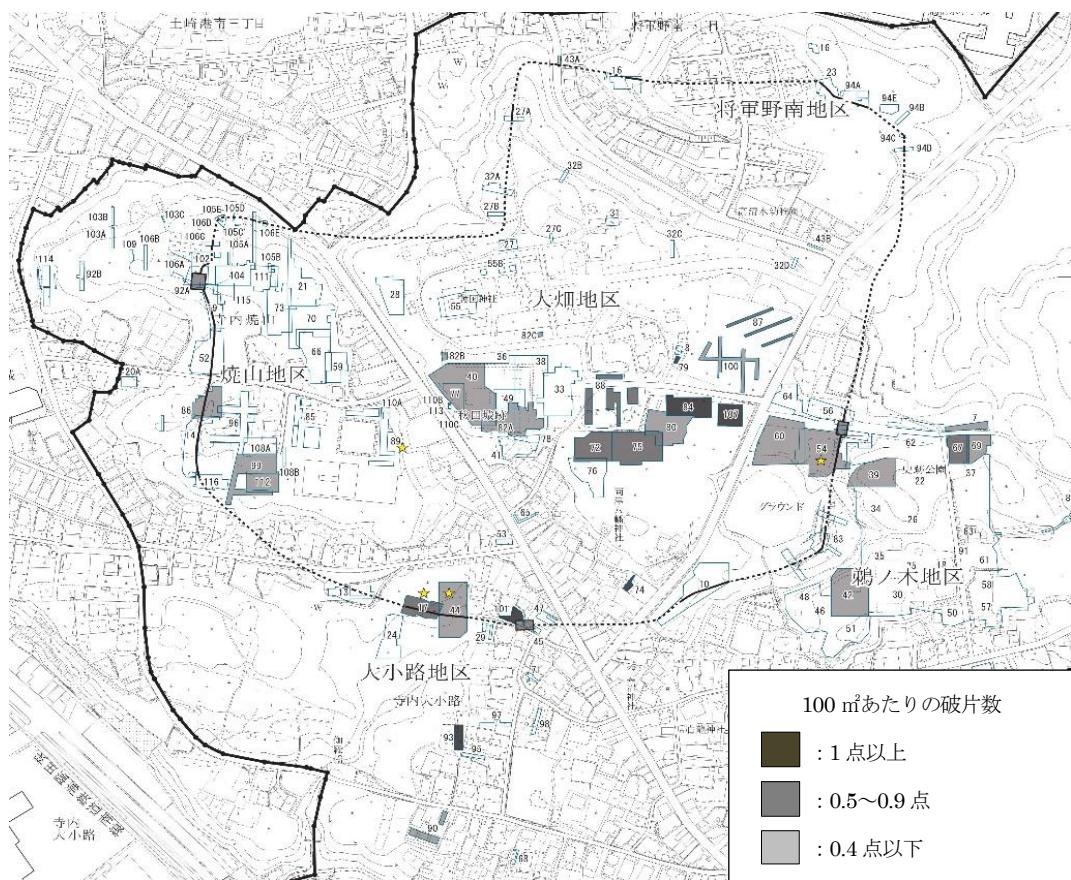
国産施釉陶器についての年代観は、9世紀中頃から後半にかけて(黒窓90窓式)が一番多く確認されており、次いで9世紀前半から中頃にかけて(黒窓14窓式)が多くなっている。その他、10世紀のものが少数確認

されている(第2表)。また、施釉陶器が出土した遺構の年代や包含層の堆積時期についても、年代が把握されるのは9世紀中頃から後半が主体を占めている。器種構成については、灰釉陶器は壺、皿、瓶、壺、三足盤、特殊器形壺がある。緑釉陶器は壺、皿となっている。貿易陶磁については、白磁は托、碗となっており、青磁は碗と壺になっている。

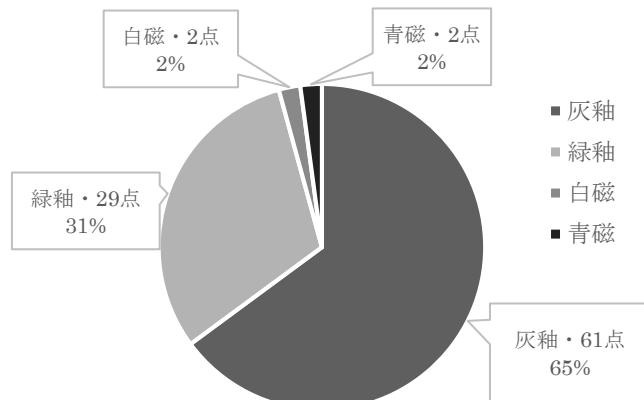
産地については、灰釉陶器は大半が猿投のものであり、東濃が数点確認されている。緑釉陶器は過半数が猿投であり、他に洛北、洛西、東濃、近江、山城のものが数点ずつ確認されている。

先述のとおり出土地点については偏りがあり、特に大畠地区に集中している。規則的配置に基づく掘立柱建物群や居住域、鍛冶工房群等が検出されており、9世紀前半から中頃にかけて継続的に生産施設が操業していた地区であり、大畠地区で確認されている施設が活発に機能していた年代観と、施釉陶器の年代観が合致することから、施釉陶磁器は主に大畠地区を中心に使用されていたと考えられる。また前述のものより年代観が新しい施釉陶器が少数ながら確認されており、それらは大小路地区で主に出土していることから、施釉陶磁器の使用地点が城内中央・東側の大畠地区から城内南側・城外南側の大小路地区へ移動していることが想定される。

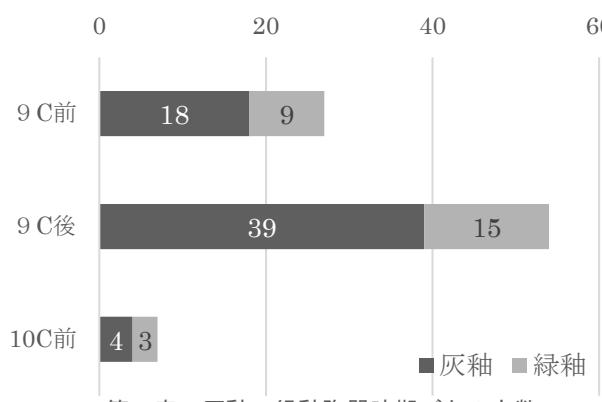
いずれも遺構外からの出土が大半を占めるが、遺構内からの出土は廃棄土坑等、遺構廃絶時に混入したと考えられる出土状況が多く見られ、儀礼的に設置された形跡など特徴的な出土状況を示すものがない。使用から廃棄までの時期差が無いことが考えられる。これら出土地点の傾向や出土状況から、施釉陶磁器が建物の廃絶と共に廃棄されていたことから、廃棄するという行為自体に儀礼的な意味が含まれていたことが指摘される。



第1図 秋田城跡における施釉陶磁器の出土状況



第1表 施釉陶磁器出土点数割合



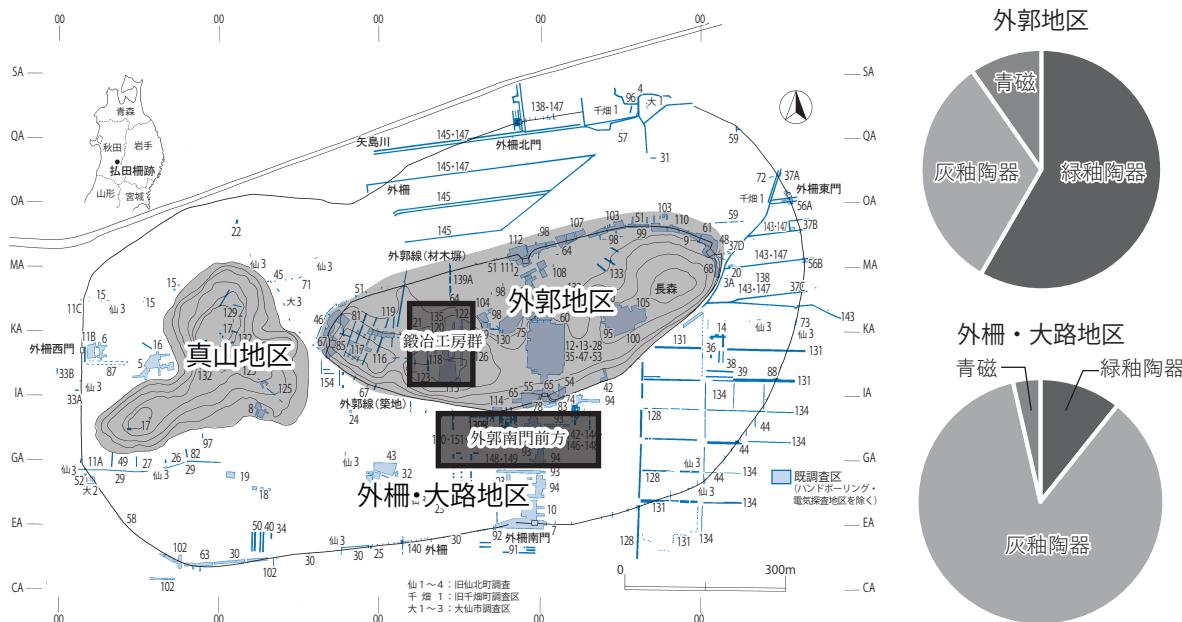
第2表 灰釉・緑釉陶器時期ごとの点数

2. 払田柵跡

秋田県大仙市払田および仙北郡美郷町本堂城回に所在する払田柵跡は、9世紀初頭に創建され、10世紀後半まで機能した古代城柵である。遺跡は長森と真山を取り囲む外柵、長森のみを取り囲む外郭線、そして政庁の三つの囲いによって区画される。今回の報告では外郭線内を外郭地区、外柵内の沖積地を外柵・大路地区とした。

払田柵跡で出土した施釉陶磁器は、緑釉陶器45点、灰釉陶器47点、越州窯系青磁8点の合計100点（同一個体を含む）である。各器種・産地・時期は第3～5表の通りである。施釉陶磁器の出土状況をみると、緑釉陶器と青磁は外郭地区の鍛冶工房群周辺（119・120・122・135次）、灰釉陶器は鍛冶工房群周辺に加えて、外柵・大路地区外郭南門前方（94・148・150次）で出土破片数が多い傾向にある。

鍛冶工房群周辺は段状に整地され、標高に応じて遺構配置が異なっており、施釉陶磁器は9世紀中頃～10



第2図 払田柵跡地区区分図と出土比率（秋田県教育委員会 2021 に加筆）

第3表 器種

地区		外郭地区	合計		
器種	地区		破片数	割合	
塊類	塊	7	1	8	17.8%
	輪花塊	2	0	2	4.4%
	棱塊	2	0	2	4.4%
皿類	皿	10	0	10	22.2%
	段皿	4	0	4	8.9%
	棱皿	2	0	2	4.4%
	耳皿	1	0	1	2.2%
	瓶類	6	0	6	13.3%
蓋類	蓋	1	0	1	2.2%
	香炉蓋	1	0	1	2.2%
器種不明		6	2	8	17.8%
合計		42	3	45	100.0%

【灰釉陶器】

地区 器種	外 郭 地 区	合 計		
		破 片 數	割 合	
塊		5	11	34%
皿	皿	2	2	9%
類	広縁段皿	0	2	4%
甕		1	0	2%
瓶 類	瓶類	9	3	26%
	長頸瓶	3	5	17%
	平瓶	1	0	2%
	手付瓶	1	0	2%
壺 類	長頸壺	1	0	2%
	四耳壺	0	1	2%
	器種不明	0	0	0%
合計		23	24	100%

第4表 産地

緑釉陶器		外 郭 地 区	外 柵 ・ 大 路 地 区	合 計	
地区	産地			破 片 数	割 合
猿投	22	1	23	51.1%	
東濃	1	0	1	2.2%	
東濃?	1	0	1	2.2%	
尾北	1	0	1	2.2%	
東海	2	1	3	6.7%	
東海?	5	0	5	11.1%	
洛北?	1	0	1	2.2%	
洛西	5	0	5	11.1%	
畿内	4	0	4	8.9%	
産地不明	0	1	1	2.2%	
合計	42	3	45	100.0%	

【灰釉陶器】

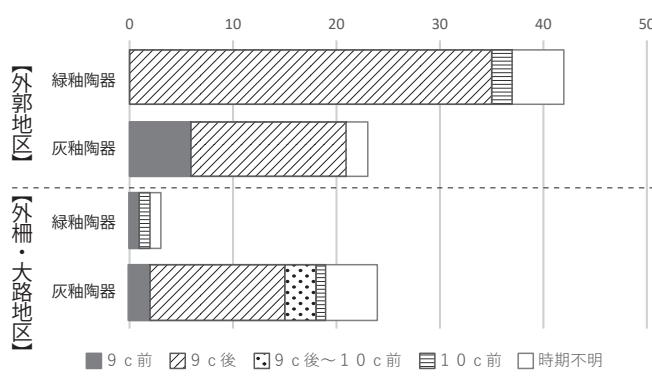
地区 産地	外 郭 地 区	合 計		
		破 片 数	割 合	
猿投	13	5	18	38.3%
猿投?	0	2	2	4.3%
東濃	2	13	15	31.9%
東濃?	0	4	4	8.5%
尾北	6	0	6	12.8%
産地不明	2	0	2	4.3%
合計	23	24	47	100.0%

第5表 時期

緑釉陶器		外 部 地 区	合 計
地区	時期		
9世紀前半	0	1	1
9世紀後半	35	0	35
10世紀前半	2	1	3
10世紀後半	0	0	0
時期不明	5	1	6
合計	42	3	45

【灰釉陶器】

地区	外 郭 地 区	外 柵 ・ 大 路 地 区	合 計
時期			
9世紀前半	6	2	8
9世紀後半	15	13	28
9世紀後半～10世紀前半	0	3	3
10世紀前半	0	1	1
10世紀後半	0	0	0
時期不明	2	5	7
合計	23	24	47



第3図 時期別出土点数

世紀前半に重複して構築された鍛冶工房が位置する北側斜面中位～上位緩斜面で出土する。地鎮などの意図的な埋納には用いられず、工房周辺から小片で出土するため、一概に祭祀と関連付けて考えることは難しい。一方、その他の地点からはほとんど出土しないため、鍛冶工房群と密接に関連した使用・廃棄が想定される。

外郭南門前方は、9世紀初頭には政庁正殿に次ぐ規模の建物が存在し、10世紀初頭の盛土整地による広場造成と建物移転を経て、10世紀代も利用された。「調米」木簡や「厨」墨書土器の存在から饗給のための広場と理解される地区である。

以上のように、払田柵跡では緑釉陶器・青磁と灰釉陶器の出土分布に違いがあることが確認された。灰釉陶器は鍛冶工房群でも出土するが、饗給の広場とされる外郭南門前方での出土も目立つため、緑釉陶器・青磁とは異なる使い方がされていた可能性も考えられる。

3. 出羽北部の様相

県内の出土状況をみると、施釉陶磁器の出土が集中する秋田城跡周辺、払田柵跡周辺、由利本荘市内越地区、にかほ市両前寺地区、点的な分布状況の秋田城跡以北に大きく分けられる。

秋田城跡周辺では、秋田城跡以外の遺跡からはほとんど施釉陶磁器が出土せず、施釉陶磁器を用いるような場が秋田城跡に集約されていた可能性も考えられる。

第6表 県内出土施釉陶磁器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	緑釉	灰釉	白磁	青磁
1	サシリ台	能代市外荒巻字サシリ台			1	
2	鴨巣Ⅰ・Ⅱ	能代市田床内字鴨巣	6			
3	上ノ山Ⅱ	能代市浅内字上の山	3			
4	小林	山本郡三種町鯉川字小林		1		1
5	小谷地	男鹿市脇本富永字小谷地		1		
6	地蔵岱	北秋田市森吉字地蔵岱		1		
7	久保田城	秋田市千秋明徳町	1			
8	虚空蔵大台滝	秋田市河辺豊成字虚空蔵大台滝		1		
9	小鳥田Ⅰ	大仙市鍵見内水上	2	2		
10	厨川谷地	大仙市払田・仙北郡美郷町本堂城	5	1		
11	内村	仙北郡美郷町千屋字内村	2			1
12	本堂城	仙北郡美郷町本堂城回字館間		1		
13	川端山Ⅲ	仙北郡美郷町金沢東根字川端山	1			
14	大坪	由利本荘市畠谷字大坪		1		
15	樋ノ口	由利本荘市福山字樋ノ口		3		
16	猿田	由利本荘市西目町出戸字猿田		1		
17	立沢	にかほ市平沢字立沢	2			1
18	前田表Ⅱ	にかほ市両前寺字前田表	1			
19	家ノ浦	にかほ市両前寺字家ノ浦		1		
20	家ノ浦Ⅱ	にかほ市両前寺字家ノ浦	24	13	5	
21	行ヒ森	にかほ市平沢字行ヒ森	1			
合計		48	27	6	3	

虚空蔵大台滝遺跡出土の灰釉陶器は11世紀代で、秋田城跡と直接的な関連はないとみられる。

払田柵跡周辺では、払田柵跡の祭祀場とされる厨川谷地遺跡、須恵器窯の存在が示唆される川端山Ⅲ遺跡など周辺遺跡からの出土も多い。いずれも払田柵跡との関連が推測され、払田柵跡を中心に施釉陶磁器が拡散したと考えられる。

由利本荘市とにかく市は城柵官衙遺跡が未確認の地域であるが、内越地区周辺には由利柵擬定地が存在し、両前寺地区では古代の官道が確認されるなど官衙関連遺跡の存在が示唆される。両前寺地区の家ノ浦Ⅱ遺跡では、水辺を中心とした施釉陶磁器廃絶儀礼が行われた可能性が指摘される。

秋田城跡以北では、まとまった量が流通していたとは考えにくい。出土遺跡では鉄生産関連施設の存在が目立ち、律令祭祀関連遺物の出土も確認される。

おわりに

秋田城跡・払田柵跡ともに鍛冶・漆工房などの生産施設が存在する地区に出土が集中し、地鎮などの意図的な埋納行為には用いられないという共通点が見出された。一方、これらの地区では秋田城跡は灰釉陶器、払田柵跡は緑釉陶器の比率が高いという相違点がある。県内全域をみても、施釉陶磁器は官衙関連遺跡から出土する傾向にあり、令和4年度の城柵官衙遺跡検討会での報告は村田の論考を追認する形となった。

引用・参考文献

- 村田淳 2012「東北地方出土の平安時代施釉陶磁器集成 1. 青森県・秋田県」『紀要XXXI』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田淳 2013「東北地方出土の平安時代施釉陶磁器 (2) 一青森県・秋田県における出土状況の整理-『紀要XXXII』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田淳 2016「東北地方北部の施釉陶磁器」『日本考古学協会 2016年度弘前大会第II分科会 北東北9・10世紀社会の変動』研究報告資料集 日本考古学協会 2016年度弘前大会実行委員会
- 村田淳 2017「東北地方北部出土の施釉陶磁器一城柵遺跡における性格の検討-」『紀要第36号』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター